

# 霞

—2014年度夏季展示室だより—

土浦市立博物館

平成26年7月19日発行(通巻第28号)

当館では「霞ヶ浦に育まれた人々の暮らし」を総合テーマに、季節ごとに展示替えを行っております。本誌「霞(かすみ)」は、折々の資料の見どころをご紹介します。展覧会や講座のお知らせ、市史編さん事業や博物館内で活動をしている研究会・同好会などの情報もお伝えします。

## 古写真・絵葉書にみる土浦(28) 絵葉書

「(土浦町大洪水)土浦小学校の惨状(昭和十三年六月三十日)」



昭和13(1938)年の大洪水を記録した写真絵葉書です。土浦小学校前の通りは川のようになり、田舟で移動する人の姿が確認できます。柵も大きくゆがんでしまっています。6月28日から30日にかけて、台風の接近に伴う激しい雨が降り続き桜川が氾濫し、中心市街地は水浸しになりました。校舎は避難所となり、約一ヶ月間休校となりました。  
【情報ライブラリー検索キーワード「洪水」「水害」】

## 目次

- 古写真・絵葉書にみる土浦(28)・・・1
- 博物館からのお知らせ・・・1
- 【夏休みファミリーミュージアム他】
- 陶硯(古代)・・・2
- 般若寺結界石(中世)・・・3
- 藩主が拝領した將軍自筆の絵画「馬図」(近世)・・・4
- 子供のための積木(近代)・・・5
- 市史編さんだより・・・6
- 地域と博物館・・・7
- 霞短信「四館共同企画展を開催して」・・・8
- コラム(28)・・・8
- 情報ライブラリー更新状況・・・8

## 博物館からのお知らせ

★★館長講座(茂木雅博館長)★★ 考古学上からみた、日本の古代信仰遺跡についてお話しします。

7月20日(日)・8月17日(日)・9月21日(日)・11月16日(日)

各日とも午後2時～(1時間30分程度) 会場:博物館視聴覚ホール

※10月12日(日)は史跡めぐりです(詳細はお問い合わせください)

【夏休みファミリーミュージアム】

★★親子史跡めぐり★★ 7/9～電話または直接申込み 参加費100円

8月1日(金)午前9時～午後4時30分(小雨決行)牛久・取手方面の史跡をめぐります。

★★ワンポイント解説会★★ 夏季展示の見どころをわかりやすくご説明します。

8月2日、8月9日、8月16日、8月23日(いずれも土曜日)11:00～及び14:00～の1日2回

展示品に関するクイズも開催します。合格者(80点以上)には記念品をプレゼントします。

★★ミニ掛軸をつくろう★★ 7/9～電話または直接申込み 参加料1,000円

第1日目(裏打ち)8月5日(火)9:30～12:00

第2日目(表装)8月9日(土)または10日(日)9:30～15:00

★★親子はたおり教室★★ 8/6までに往復葉書で申込み 参加料200円

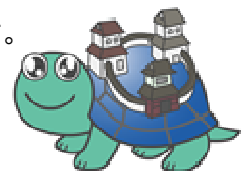
8月22日(金)・23日(土) 午前の部10:00～12:00/午後の部13:30～15:30

★祝日開館★ 7月21日(月)、9月15日(月)、9月23日(火)、10月13日(月)、11月3日(月)

★無料開館日★ 11月3日(月)、11月13日(木)

★11月17日(月)～平成27年1月5日(月)は、収蔵庫増設工事のため休館予定です。

★スタンプカード発行のお知らせ★  
イベントに参加された方にスタンプカードをお渡ししています。集めたスタンプの数に応じて記念品をプレゼント!



博物館マスコット  
亀城かめくん

※お知らせ欄の行事・日程は一部変更となる場合がございます。

# 陶硯

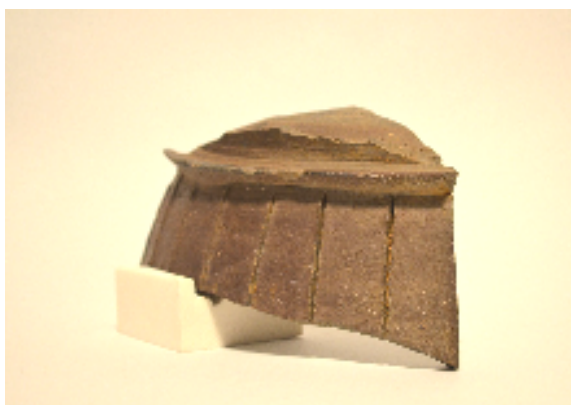
—今に残る焼き物でできた古代の硯—

今回は、市内の古代の遺跡で見つかった文房具の一つである陶硯をご紹介します。

硯といえば多くの方々は、小学校の習字の時間に用いた黒い石でできた長方形の硯を思い起こすことでしょう。古代においては、全国的に焼き物でできた陶硯が用いられました。この陶硯にもいくつかの種類があり、製作当初から墨を磨るための専用品として作られたものや、ものを盛る器を硯に転用したものなどがあります。古代の遺跡で見つかる陶硯は意外に転用品が多く見られます。

下の写真左は陶硯の専用品で、右が土器を転用した陶硯です。いずれも市内東部のおおつ野に所在した遺跡から出土し、今からおよそ1,200年前の平安時代のものです。前者は石橋北遺跡で出土しました。登りが窯で焼かれたもので、須恵器と呼ばれています。全体の1/4程度が残る破片資料で、本来の形は、横から見るとすそが広がる台形、上から見ると円形となり、このような特徴から円面硯とも呼ばれます。上部の円形の中央部分は墨を磨ったために平滑で、その縁は凹んで磨った墨汁がたまる仕組みとなっています。また、後者は沓杯清水西遺跡で出土しました。野焼きで焼かれたもので、土師器と呼ばれています。本来の形は皿の下に台が付いた器ですが、うまい具合に割れてしまったためか、円形の台の部分のみを逆さにして硯に転用したものです。円形の台の中央はやはり平滑になっており、1,000年以上経た今日でも黒く墨が残っています。

日本の歴史の中での硯は、今から約1,400年前の飛鳥時代が始まる頃に、古代社会の根幹をなす律令制度の仕組みや仏教の導入にともなって、中国大陸から伝わったものと言われます。そして、平安時代の終わりから鎌倉時代になると、中国大陸で新たに発見された石材による石硯が人々に重用された影響を受け、日本国内でも陶硯がすたれ、石硯が多用されるようになります。日本の古代において使用された硯は、現代の私たちが経験から思い描くものとは材質や形がずいぶん異なるものと言えます。(関口 満)



陶硯の専用品（横から見た様子）



土器を転用した陶硯（上から見た様子）

8/2（土）11時・14時からこのページでご紹介した資料のワンポイント解説会を開催いたします。

下記の資料もあわせてご覧ください。（いずれも古代コーナーに展示）

- 田村沖宿遺跡群出土の墨書土器「國厨」（当館所蔵）
- 栗山窯跡の硯（円面硯）（当館所蔵）



はんにゃ じけっかいせき

# 般若寺結界石

にんしょう ひたちげこう  
—忍性の常陸下向—

市内<sup>しじつか</sup>にある般若寺は、多くの文化財を伝える古刹<sup>こまつ</sup>として知られています。建治元（1275）年の年号などが刻まれた銅鐘（国指定重要文化財）や、鎌倉時代末期頃の作と推定される石造五輪塔（茨城県指定文化財）など、鎌倉時代を中心とした貴重な文化財が今も境内に残されています。これらの文物<sup>ぶんぶつ</sup>は、般若寺が当時、西大寺流律宗<sup>さいだいじりゅうりつしゅう</sup>の拠点であったことと深く関わります。西大寺流律宗とは、奈良西大寺で戒律復興に努め、民衆の救済事業などに力を尽くした叡尊<sup>えいそん</sup>の門流で、鎌倉時代を中心に急速な広がりを見せました。今回ご紹介する結界石も、律宗との関わりを雄弁に物語る資料です。

結界とは、一定の範囲の場所を限ることをいいます。戒律を重んじる律宗では、結界で定めた区域内で僧侶が修行や仏教儀礼を行ないました。その境界を示すために立てられるのが結界石です。般若寺には2基の結界石が残っており、いずれにも「大界外相<sup>たいがいげそう</sup>」と刻まれています。結界には、およそ大界、戒場、小界の三種類があります。最も基本的な「大界」は通常その寺院の伽藍<sup>がらん</sup>の区域を示し、「外相」はその外側を意味します。般若寺の結界石は、もともとは4～5基で構成されていたと思われませんが、立てられていた場所は明確ではありません。2基ある結界石のうち、博物館で展示する1基（茨城県指定文化財）は、裏面に「建長五年<sup>けんちよう</sup>七月二十九日」と刻まれています。

中世の結界石は全国的にも限られ、東国ではこの筑波山麓に集中します。般若寺のほか、市内の東城寺<sup>とうじょうじ</sup>と、三村山極楽寺<sup>みむらさんごくらくじ</sup>があったつくば市小田にあります。いずれも建長5（1253）年の年号をもち、字体もよく似ています。この一連の結界を主催したのが、叡尊の高弟である忍性です。建長4年、忍性は西大寺流律宗を東国に広めるため、叡尊の許可を得て常陸国に下向します。12月に極楽寺に入り、翌年の7月に般若寺、9月には東城寺で結界を行ない、律院化を進めます。以後、鎌倉に移るまでの10年間、忍性はこの地を拠点に律宗の布教に努めます。忍性による結界の後、般若寺の寺容は大きく整備され、鎌倉をはじめ関東各地の律僧を迎えるほどになります。そればかりか、律宗を介して奈良や鎌倉の新たな文物・技術がもたらされ、地域社会に大きな影響を及ぼしました。（堀部 猛）



般若寺結界石（般若寺所蔵、当館寄託）

8/16（土）11時・14時からこのページでご紹介した資料のワンポイント解説会を開催いたします。

下記の資料もあわせてご覧ください。（いずれも中世コーナーに展示）

- 氏名未詳書状（複製）  
（当館所蔵、原資料は神奈川県称名寺所蔵 神奈川県立金沢文庫保管）
- 西大寺光明真言結縁過去帳（複製）（当館所蔵、原資料は奈良県西大寺所蔵）
- 般若寺出土文字瓦（当館所蔵）



# 藩主が拝領した將軍自筆の絵画

とくがわつなよし うまのず  
— 徳川綱吉筆「馬図」 —

一頭の馬が桜の木の下にたたずんでいます。馬は、静かに木に寄り添って満開の花を楽しんでいるかのようです。外来の馬種と交雑していない日本固有の小型の馬らしく、背から腰にかけて斑紋が広がっています。

本作品を描いたのは5代將軍徳川綱吉（1646～1709）です。狩野派に学び、水墨画に巧みで、兎や鷺など動物の絵を多く描き、馬図も複数伝わっています。芸能に明るく、特に能楽を好み、天文・暦学・国学・歌学を奨励し、元禄文化の一翼を担ったと評価されています。

落款「内府綱吉筆」から、延宝8（1680）年8月21日、綱吉が正二位内大臣兼右近衛大将、かつ征夷大将軍・源氏長者の宣下を受けて以降、宝永2（1705）年3月5日、右大臣に任命されるまでのあいだに描かれたものです。

箱の表には「内大臣源公御画」、裏には「貞享五年戊辰四月八日於營中賜之 土浦城主從四位下侍從相模守土屋政直家珍」と墨書があります。「土屋政直」とは、土浦藩土屋家2代藩主政直（1641～1722）で、土屋家の系譜に「元禄戊辰年四月八日 御筆馬御絵一幅拝領」（「御系譜」国文学研究資料館所蔵 貞享5年9月30日に元禄と改元）と箱書きを裏付ける記事があります。

政直は、貞享4（1687）年10月13日、綱吉から老中に任じられ、以後28年間綱吉政権を支えました。

綱吉自筆の絵を拝領した貞享5（1688）年4月8日は、政直が老中に着任して一年もたたないうちでした。この他にも綱吉自筆の「省察」（元禄7年4月10日）や「色紙一幅」（元禄8年9月12日）を御成の際に拝領しました。功勞を賞され、刀剣や茶道具を拝領することもありました。

將軍からの拝領品は、將軍との強い紐帯を示す意義があります。土屋家では將軍自筆の書画、刀剣、茶道具などの拝領品を国許である土浦城の櫓に収納し、毎年手入れし、大切に管理しました。

土浦城は城持ち大名土屋家の支配の拠点であり、櫓は土浦城の象徴です。収納された数々の拝領品は、將軍と譜代大名の結束の証であり、土屋家を代表する家宝でもありました。

（木塚久仁子）



「馬図」当館所蔵

8/9（土）11時・14時からこのページでご紹介した資料のワンポイント解説会を開催いたします。

下記の資料もあわせてご覧ください。（いずれも展示室2に展示）

- 黒漆塗三石九曜紋入行器（当館所蔵）
- 家紋散らし脇息（当館所蔵）



# 子供のための積木

## —土浦幼稚園に残る玩具—

積木といえば、木製やプラスチックなどを素材にした、さまざまな種類のものが市販され、一度は遊んだことのある日本のおもちゃの代表格といえます。一見日本にもともと存在したかに見える積木ですが、実は明治時代に日本に伝わった外来の玩具でした。

明治 18 (1885) 年に茨城県で最初に開園した土浦幼稚園には、数種類の積木が残されています。写真①は最も古い時期の積木で、「積体法」「積立」などと訳されたもので、「幼稚園」という言葉とともに日本に伝わった「二十恩物」のひとつです。「恩物」は神が幼児に賜った遊具という意味のドイツ語ゲーベの訳語で、そのうち第三恩物から第六恩物までが、のちに「積木」とやさしく翻訳され、恩物から独立し一般化しました。写真②は市販された積木で、赤の着色部分がとても鮮やかです。特徴的なのは、箱の蓋裏に明治 34 年の「内務省東京衛生試験所」による「安全着色証明」が添付されていることです。明治 30 年代に入ると、中上流層の家庭を中心に幼児教育への関心が高まり、さらに 40 年代には町の玩具屋でもさまざまな積木が販売されるようになりました。中には子どもが口に入れると有害な塗料を使用したものもあったようですが、土浦幼稚園では、健康に配慮した最新の玩具を入手していたことがわかります。土浦幼稚園で調べたのは、市販品ばかりではありませんでした。写真③はフレーベル館の大正 10 (1921) 年頃のカatalog『幼稚園家庭用 保育用品目録』ですが、その中に「土浦幼稚園案 大恩物」という広告があります。大型の積木が本格的に普及しはじめるのは昭和に入ってからですが、早い時期に土浦幼稚園が恩物に工夫を加えた注文品がもとになり、販売された大型の積木があったことがわかります。大型の積木は、幼児に共同作業をうながすものでした。土浦幼稚園の積木は、その歴史を語るものであるとともに、幼稚園で実践された先進的な幼児教育を知る手掛かりとなるものでもあります。(野田礼子)

※本稿の執筆にあたっては、是澤博昭氏（大妻女子大学准教授）よりご教示をいただきました。



写真①  
第四恩物 第二積立法  
(土浦市立土浦幼稚園  
所蔵、当館寄託)



写真②  
幼稚園教育都美喜  
(土浦市立土浦幼稚園  
所蔵、当館寄託)



写真③ 大恩物の広告  
『幼稚園家庭用 保育用品目録』より

8/23 (土) 11時・14時からこのページでご紹介した資料のワンポイント解説会を開催いたします。

- 下記の資料もあわせてご覧ください。
- 教育玩具積木（近代コーナーに展示）
  - 大型積木（展示ホールに展示）



## 市史編さんだより

### ～～ 『家事志』に見る女性の生き方 その二 ～～

今回は、「霞」第27号に登場した女性とは対照的、ともいべき女性について書いてみたいと思います。まず色川家の隣家の娘「ゆう」に登場してもらいましょう。「ゆう」は、父親の店に商売の見習いに来ていた「伊勢屋」の跡取り息子林兵衛と恋仲になり、結婚を申し込まれますが、親が承知しませんでした。「伊勢屋」を継いだ林兵衛は別の女性と結婚し、「ゆう」も聳をもらって家を継ぐことになりました。しかし、それがどうしても気に入らず、離縁しようとするのですが、聳の実家との交渉が難航し、まとまりません。三中ははじめ大勢の人が解決に尽力しますが、どうにも埒があきません。すると「ゆう」は大洗にある願入寺に駆け込んでしまいます。願入寺には駆け込み寺の機能があったようで、交渉に乗りだしてくれますが、決着がついたのは足かけ3年後でした。その2年後には、先妻と離縁した林兵衛と結婚したのです。自分の意に染まぬ縁談を嫌って、周囲の人々や駆け込み寺まで巻き込んでの騒動に、三中は苦々しく思ったようですが、今の時代から見れば、当たり前の行動かも知れませんね。

同じような女性が、林兵衛の従弟長兵衛の妻「てる」です。始めは水戸へ嫁いだはずなのですが、いつの間にか戻って来て、長兵衛と懇ろになり、結婚せぬまま子どもが生まれます。長兵衛は本来「伊勢屋」の跡継ぎのはずですが、先代の当主が死去した時あまりに幼かったため、従兄の林兵衛が店を継いだという経緯がありました。そのことを巡って親類間に揉め事があり、長兵衛の生活が安定しないのですが、長兵衛自身も優柔不断な性格で煮え切りません。「てる」と長兵衛は一応仮祝言はしますが、きちんとした所帯も持てぬまま「てる」は2人目の子どもを産みます。長兵衛は妻子をおいて江戸へ行ってしまったり、また戻って来て商売を始めたがうまくいかなかったり、と頼りにならない夫なのです。住む家もなく、親戚や知人を頼って訪ねて行っても、どこからも拒否される、といったこともありました。この頃には、三中は川口に移っていてあまり関わらず、美年が何かと心配して尽力し、「らく」も異母妹にあたる「てる」について、いろいろと気を遣っていますが、なかなか落ち着きません。まるで現代の、フリーターと同棲して宛てのない暮らしをしている女性のようにありませんか。

また、美年家の奉公人「てつ」は、同じ奉公人の仁兵衛に思いを寄せていたらしく、親の病気などで一旦暇をとって在所へ帰りますが、家出をして美年家に来てまた雇ってもらいます。奉公する時の仲介人だった在所の医師のはからいで、仁兵衛と結婚し、独立して所帯を持つことになりました。今でいう職場結婚ですが、決着がつくまでには、仲介の医師が美年に何度も手紙を出したり訪ねて来たりと尽力しています。その意味では、やはり周囲の人達を悩ませた女性といえるでしょう。

最後に、美年が「土浦始まって以来の大騙り」と評している女性「たみ」に登場してもらいましょう。「たみ」が初めて土浦へやって来たのは嘉永4(1851)年のことと思われます。3ヶ月ほど美年の店で奉公した後、不動長屋に移って商売を始めました。裕福な商家の内儀に取り入って、損料を払って衣装を借りだし、それを貸し付けたり、資金を借りてそれを高利で貸す、という訳です。美年もふとんを作って「たみ」に預け、「たみ」はそれを貸し出す、という話に乗ります。口がうまく、多分人当たりもよかったので、6年ばかりの内に600両も取り込んだ、と美年は言っています。そして、怪しみだした人々の監視の目をくぐって、まんまと逃げてしまいます。町の人達は慌てて方々へ探索の人を出して行方を尋ねますが、見つかりません。その後『家事志』の終末に、水戸の方にいるという噂があり、「てつ」の夫仁兵衛も、町の人と一緒に探しに行く記事がありますが、結果がどうなったのかはわかりません。うまい投資話に乗せられて資産を失ってしまう現代の人達と、よく似ている話ではないでしょうか。『家事志』にはこのように様々な人達の人生が書き込まれており、その意味で興味深い日記といえるのではないかと思います。

(市史編さん係非常勤職員 菅井和子)

# 地域と博物館



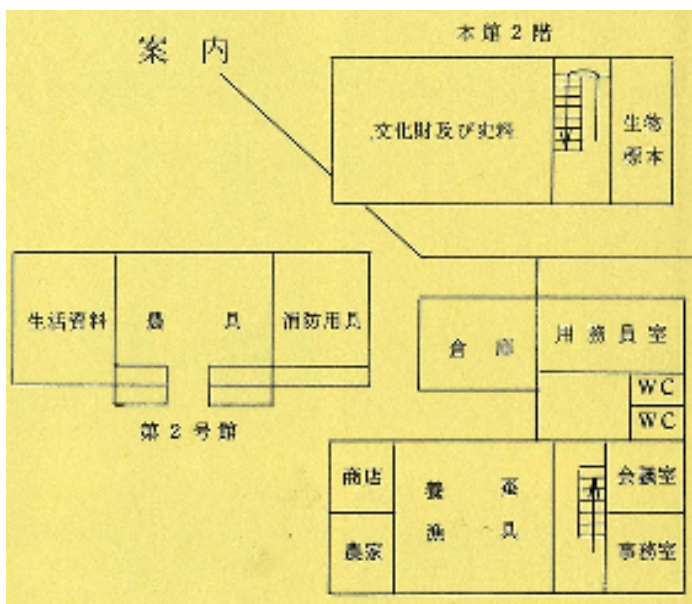
## 博物館をつくる（１） ～その必要性～

土浦市立博物館は昭和 63（1988）年 7 月 2 日に開館し、昨年開館 25 周年を迎えました。これを機に、当博物館の四半世紀の歴史を振り返り記録することをおして、地域博物館の意義や今後の在り様などについて考えてみたいと思います。まずは、博物館づくりからひもといいきましよう。今回は、「博物館をつくる」の第 1 回、博物館の必要性について触れてみます。

当博物館の前身として、市立郷土資料館がありました。博物館の敷地は旧陸軍憲兵分隊跡で、郷土資料館は憲兵分隊の木造官舎を利用し、昭和 51 年 11 月に開館しています。この建物は、戦後は市立幼稚園や図書館としても使われていましたが、博物館ができるまでの 10 余年、市立郷土資料館として民俗資料を中心に地域資料の収集と展示公開の役割を果たしてきました。開館した郷土資料館には、「この資料館には、とくに珍しいものや高価なものは展示されていないが、この土地に残されたさまざまな資料等を展示保管することにより、先人達の生活を偲び、その様子を長く後世に伝えるものである。」とする設置の意義が掲げられていました（『土浦市立博物館年報』第 1 号より）。

郷土資料館は戦前に建てられた木造 2 階建の古い建物で、当然、空調設備などありません。1 階の正面入口脇にあった小さな事務室には、夏は扇風機、冬は石油ストーブが置いてありました。この事務室以外は、建物全体が収蔵庫兼展示室で、ガラスの小ケース以外はそのほとんどが露出展示になっていました。特に 2 階の展示室は窓が多く、明るい空間で日当たりがよく、西日が差しこんだ板張りの床が印象に残っています。

展示には、復元された商家の店先の他、農具・消防・予科練航空隊等のコーナーがあり、収集された資料がコーナーごとに分類されて展示してありました。展示室には、手作りの模型や人形などもいっしょに配置され、郷愁を誘う独自の雰囲気醸し出していました。資料館の敷地は、江戸時代の土浦城二の丸跡に位置しており、本丸を中心に整備された隣の「亀城公園」には櫓門や霞門など江戸時代の建造物も残されています。ただ、このような歴史的環境にありながら、資料館には、江戸時代の土浦城や土浦藩に関わる資料はほとんど収蔵されていませんでした。



土浦市立郷土資料館案内  
（土浦市教育委員会発行）より

先の設置の意義からも窺い知れるように、前身の資料館は、貴重な歴史資料を適切に保存管理し、展示公開できる博物館施設ではありませんでした。展示も、先人たちの生活の一部を窺い知ることはできても、この地域の長い歴史やその特色を体系的に紹介するものではなかったのです。博物館が開館したばかりの頃、親しみやすい郷土資料館に対し、博物館は敷居が高いという声も耳にしましたが、保存環境の整った収蔵庫や展示室を備え、収集した資料を調査研究し体系的に展示活用できる博物館、このような本格的な博物館の必要性が土浦市立博物館の出発点となりました。（塩谷 修）

「霞短信」コーナーでは、博物館活動に関わる方々の声やサークル活動記録などをお伝えしております。

今号は、四館共同企画展「幕末動乱—開国から攘夷へ—」の担当学芸員、高橋秀之さん（東京都・日野市立新選組のふるさと歴史館）に寄稿していただきました。

## 「四館共同企画展を開催して」

3月21日から5月6日まで土浦市立博物館で開催された「幕末動乱—開国から攘夷へ—」の展示は、関東にある4つの博物館が共同で企画し、それぞれの博物館を巡回しています。2館目の日野市立新選組のふるさと歴史館での展示も7月13日に終わり、次は栃木県の壬生町立歴史民俗資料館で7月26日から9月15日まで、そして、東京都の板橋区立郷土資料館で10月4日から11月30日で終了いたします。

当館では2012年に山形県の鶴岡市郷土資料館、2013年には山形県庄内町にある清河八郎記念館と共同で巡回特別展を開催するなど、近年「新選組」や「新徴組」などに関係する博物館と連携した企画を開催してきましたが、4館での共催は今回が初めての経験でした。市区町村の博物館が4館共同で展示を行うというのは珍しいかと思います。そのため、開催まで月1回程のペースで職員が集まり会議をして、展示構成や解説の表示方法などの打ち合わせを行いました。特に図録の作成方法や展示資料の解説パネルなどは各館それぞれのスタイルがあり、どの形にするか悩むこともありました。

展示以外では、連携イベントとして4館を巡るスタンプラリーも企画しましたが、おかげさまで、土浦のスタンプを押されている方が日野に来館される姿も多く見受けられ、お話をうかがうと4館達成を目指していますという方もいらっしゃいました。

関東の幕臣や藩士、草莽の志士などの人たちがどのように「幕末動乱」にかかわってきたかに焦点をあて、現在の自治体の枠にとらわれず開国から攘夷への時代をご紹介できた今回の展示は有意義なものになったと思います。今も昔も人と人の繋がりが大きな力となっているように、これからも「枠」とらわれず、様々なかたちで連携や交流をしていければと考えております。

（日野市立新選組のふるさと歴史館 学芸員 高橋秀之）

## コラム(28)－展覧会を形にする方法－

四館共同企画展として開催した第35回特別展「幕末動乱」の特徴のひとつは、監修者をお迎えしたということでした。通常当館では主担当が中心となって展示の準備を進め、その他職員が補佐します。外部の方に監修いただく機会はまずありませんでしたが、今回は、幕末史のご専門である宮地正人先生にご協力いただくことができました。

準備の過程で、スタイルも実績も異なる4館で、果たして一つの展覧会を成立させることができるのかと不安になることがありました。しかし、それを払拭できたのが、監修者から示された道筋やアドバイスでした。オーケストラには指揮者が、サッカーには監督が必要であるように、プレーヤーがそれぞれのパートをこなすだけでなく、納得させながら一つの方向に向かわせる力、その力が果たす役割が大きいということを実感したのです。展覧会を形にする方法を新たに認識できたことは、大きな収穫でした。  
（野田礼子）

## 情報ライブラリー更新状況

【2014・7・19現在の登録数】

古写真 532点（＋5）  
絵葉書 439点（＋5）

※（ ）内は2014年5月13日時点との比較です。展示ホールの情報ライブラリーコーナーでは画像資料・歴史情報を順次追加・更新しております。1ページでご紹介した古写真・絵葉書もご覧いただけます。

霞（かすみ） 2014年度  
夏季展示室だより（通巻第28号）  
編集・発行 土浦市立博物館  
茨城県土浦市中央1-15-18  
TEL 029-824-2928  
FAX 029-824-9423  
<http://www.city.tsuchiura.lg.jp/section.php?code=43>

1～6ページのタイトルバック（背景）は、博物館2階庭園展示です。

2014年度夏季展示は、2014年7月19日（土）～11月16日（日）となります。「霞」2014年度冬季展示室だより（通巻第29号）は2015年1月6日（火）発行予定です。次回のご来館もお待ちいたしております。

※展示室だより「霞」は当館ホームページからもご覧になれます。（カラー）